広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	小説教材の「読み深め」に関する実践的研究 : 学習者は川上弘美「おめでとう」をどのように読み進めたか
Author(s)	玉木, 雅己
Citation	論叢 国語教育学 , 18 : 59 - 68
Issue Date	2022-07-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53672
URL	https://doi.org/10.15027/53672
Right	
Relation	

小説教材の「読み深め」に関する実践的研究

―学習者は川上弘美「おめでとう」をどのように読み進めたか―

玉木　雅己

一　はじめに　研究の位置付け

論者（玉木）は、二〇二〇年度に、二年生の二つのクラスの「現代文B」の授業で、小説教材単元を特設し実践した。この単元では、川上弘美の小説「神様」「神様２０１１」「草上の昼食」「おめでとう」を、一年間をかけて断続的に読み続けた。この単元学習の詳細は、玉木（二〇二一、二〇二二）を参照して頂きたい。

本稿は、このうち「おめでとう」の授業の実践報告（二〇二一年一月・三月に実施）である。この小説は、教科書には未収録である。これまでいくらか作品研究が発表されているものの、十分に研究が深まっているとはいいがたい。本稿は、「おめでとう」の教材化のための基礎的研究としても位置付けたい。

今回は、研究資料として、学習者のワークシート（授業の中で他者との協同によって読み取った内容を記入したもの）を積極的に活用したい。その分析を通して、学習者の読み深めの実態を解明することは、「おめでとう」の作品研究や授業構想に極めて有効だと考えられる。

二　川上弘美「おめでとう」の教材研究　基本的な情報の整理

（一）発表時期

「おめでとう」の初出は、「朝日新聞」（二〇〇〇年一月三日）である。その後、単行本『おめでとう』（新潮社、二〇〇〇年十月）に収められた。同書は短編十二篇から成る。新潮文庫版（二〇〇三年）・文春文庫版（二〇〇七年）とも収録作品の変更は無い。ただ、両者とも単行本巻末に掲載されていた「初出一覧」は省略されている。

「おめでとう」には、「西暦三千年一月一日のわたしたちへ」というエピグラフ（題辞）が付されている。

作品の発表当時は、「ミレニアム（千年紀）」が流行語となっていた。このブームは欧米からもたらされた。当時の日本社会には、どこか浮かれた雰囲気が感じられた。過去へと遡り、「源氏物語」執筆から約千年ということに着目した催し物も、関西地方では行われていた。

本小説は、そんな華やかな世相とは正反対の世界を描く。発展から取り残され、物質的な豊かさとは縁遠い世界が舞台になっている。

（二）登場人物

登場人物は、語り手と「あなた」と「あなたのおとうさん」である。年齢・性別・容姿・体型等、三人とも外見を規定する記述は無い。

語り手の呼称は、本文中には認められない。本稿では、エピグラフを援用して、便宜的に〈わたし〉という名称を使用する。

「あなた」と〈わたし〉は、「ぎゅっと」抱擁を交わす親密な関係

である。しかし、二人は一緒には暮らしていない。「あなた」は、〈わたし〉のところに時々訪ねてくる。事前の予告があるようには読み取れない。また、それほど長居することは無いようである。

「あなた」の内面に関する説明は認められない。〈わたし〉の語りを通して、「おめでとう」「忘れないでいよう」等の発言と、二人がいっしょにとった行動だけが描写されている。

「あなたのおとうさん」は、作品中には実際には姿を現してはいない。彼が、〈わたし〉に伝えた言葉だけが紹介されている。その言葉を、〈わたし〉は、いつ聞いたのかは分からない。「あなたのおとうさん」が、今も生存しているのかどうかも詳らかではない。

千年後の世界には、この三人以外にも生存している人間がいる。これらの人々については「このあたりには何人か住んでいる」「今は少ししかいない」等、少人数だということだけが説明されている。

（三）作品中の時間

「おめでとう」に関する時間としては、先ず、エピグラフの千年が挙げられる。しかし、千年という途方もない時間を、実感的に理解するのは容易ではない。高橋（二〇一八）は、「おめでとう」は、『神様２０１１』で描かれている世界のさらに後の「アフターストーリー」とも言うべき世界」178 を描いているとする。今回の授業でも、学習者は、「おめでとう」を、「神様２０１１」のいくらか後という程度の時間の隔たりでとらえているように感じられた。

作品には、〈わたし〉が「あなた」に再会した一日が描かれている。この一日は、次に示すように三つの部分に分けることができる。①～⑰は、形式段落の通し番号を示す。

「あなた」が到着する前　①～⑤
「あなた」と二人で過ごした時間　⑥～⑭
「あなた」が帰った後　⑮～⑰

一日の時間の進行は、①が前夜の話題から始まることを含めても、ごく自然である。途中に、〈わたし〉の過去の経験（⑤、⑧、⑪、⑯）が挟み込まれている。一方、未来に対する言及は、作品末尾の「つぎに会えるのは、いつでしょうか」という〈わたし〉の質問だけである。

（四）〈わたし〉の語る内容

「おめでとう」は、掌編小説である。字数は約一四〇〇字と、短編「神様」の半分以下である。四百字詰め原稿用紙三枚半に過ぎない。

「おめでとう」は短い字数ながらも〈わたし〉の一人語りによって独自の作品世界を構築している。この点について、田口（二〇二〇）は、「荒廃した未来の「トウキョウ」近郊で書かれた「手紙（詩）」という体裁をとっている」と指摘する。その語り口からは、一人芝居の脚本のようにも感じられる。

〈わたし〉は、①・②・⑥・⑫・⑰の冒頭文で、「寒いです。」と繰り返す（⑫のみ「少し寒いです。」）。文中には、〈わたし〉の住居や衣服の説明は無い。しかし、真冬なのに満足に暖も取れないような暮らしであることはよく伝わってくる。

〈わたし〉が語るのは、この寒い一日の自分の行動や思考である。語られる話題は、次の三点に整理できる。

［食料］自給自足の食事（飯、干し魚等）の質素さ・乏しさ。
［情景］遠くにあるもの（トウキョウタワー、入日）に対して感じる不思議さ。
［記憶］人間の存在、日付、歌を記憶することの必要性。

表1は、三つの話題について、形式段落別に整理したものである。表1から明らかなように、三つの話題は繰り返し本文中に登場する。表1には、「寒いです」と、〈わたし〉と「あなた」の抱擁も加えて

いる。これらも繰り返されるという共通点を持つからである。

どの話題に対しても、〈わたし〉の説明には、変化や深化は認められない。同じような認識内容が繰り返し述べられるだけである。この点は、「おめでとう」の内容面の特徴である。

表 1

形式段落No.	「(少し)寒いです」	食料			情景			記憶			抱擁(ぎゅっとする)
		飯・米	魚・干し魚・釣り	畑作・芋と粟	入日	トウキョウタワー	遠くのものへの意識	新年／おめでとう	記憶(の大切さ)歌	あなたのおとうさん	
1	○										
2	○	○	○								
3		○	○	○							
4			○				○				
5					○						
6	○		○			○					
7			○								■
8									○	◆	
9					○		○				
10		○	○								
11							○		○	◆	
12	○							○			
13								○			■
14									○		
15		○		○		○					
16							○		○	◆	
17	○							○			

（五）表現法の特徴

この作品は、会話体の文体で綴られている。敬体を基本としながら、常体が部分的に混じる。常体と敬体の使い分けについて、明確な法則性を指摘することは難しい。

全編を通して、平明な表現で書かれている。その中で、後掲のような個性的な表現法が（特に前半部分で）多く用いられている。

・風の「いつもない音」を表すオノマトペ―ボウボウボウボウ。ざんざんざん。ルルルル。ゆんゆん― ①

・炊飯の匂いの比喩―「秋の夜、眠く眠くなったときの床の中みたいな匂い」 ②。

・飯の炊き方を表す「薄い」という表現―「米はほとんどないので、飯は薄い」③、「飯を薄く炊いて」⑮。

・「入日」というやや古風な表現 ⑥・⑮

三　学習者の作品世界の読み取り

「おめでとう」では、この世界が希望が無い状態に陥ってしまった理由や経過は全く説明されていない。野口（二〇〇五）は、次のように述べている。

「表題作「おめでとう」に至っては、〈あなた〉〈わたし〉〈わたしたち〉がどこにいるかさえもほとんど不確定だ…中略・論者…『おめでとう』の〈わたしたち〉は、どこに立って語りかけているのかわからないような、とらえどころのない存在なのであり」76―77頁（論者注・引用中の『おめでとう』は単行本を意味する。）

授業では、学習者が、「とらえどころのない」状態に止まらず、作品世界に少しでも接近できるような読み取りを行えるよう工夫した。

（一）千年後の世界

一月の授業では、先ず、この作品の中では、いったい何が起こっているのかを考えた。

学習者は、作品の終末的な世界について、環境の悪化・寒冷化、文明の退化、貧困化、人口減その他、それぞれの見方でとらえていた。

このような状況に陥った原因としては、多くは戦争、災害等を想像していた。「今戦争が起きても核が主流で人類滅亡の危険とか言われてんのに。未来の世界でやったら東京タワーなんて余裕で吹き飛ぶ。となると、コロナより殺傷能力の高いウイルスや細菌兵器かもしれない」というような今日的な解釈も出された。

〈わたし〉の周囲に人が少ない理由に関しては、社会の階層が分断されて貧富の差が拡大し、富裕層は別の場所で暮らしているという解釈も出された。そこから発展して、地球に見切りを付けて、他の惑星へ移住を始めたのではないかというSF的な見解を示す者もいた。

本間（二〇〇三）は、さらに別の可能性を想定する。

「人がたたずむ廃墟の風景は、なぜか、なつかしさに満ちている。廃墟はあの世への入り口で、この世の者たちはいつかみんなあちらから来て、あちらへ帰って行くのだから。…中略・論者…千年後のお話は実を言うと、たったいまのお話であるのだよ、と読める。ここに描かれた年の跡は、時を越えて、あの世をこの世に引き寄せる。」160頁

「おめでとう」は、ディストピアな世界を舞台とする作品である。このような状態でも生き続ける者の姿を描いている。「あの世」へ繋がっているという解釈には、意見が分かれそうである。それだけに、その妥当性の検討は、学習者の作品理解を深めることになろう。

ところで、「おめでとう」には、神様の存在を感じる記述は認められない。この点について、学習者は、「つらいとか、そんな風に思うことがなくなったので、神様に祈るという考えもなくなったから」「人間があやまちを繰り返したことで、神様に見放されて、この物語のような世界になってしまった」等、信仰が揺らいだ世界の話として考えていた。

少数ではあったが、時間を逆転させて、「「神様」が始まる前の話」「「神様」の「わたし」に出会う前の話」といった見方する者もいた。「くまはこれから神様になっていくので、まだ神様は誕生していない。今の世界から、「神様」の世界に行くことで、くまは神様になった」未来ではなく、神話的な過去を描く作品だと理解するわけである。

「おめでとう」の後に、「神様」の現代が続くというのは、「トウキョウタワー」の存在を考えると無理はある。しかし、作品の中の時間軸について考えるためには、たとえ否定されたとしても、その可能性を検討しても良いだろう。

（二）　現代と作品をつなぐ言葉―「トウキョウタワー」「この島」

三月の授業では、「トウキョウタワー」と「この島」に着目して検討を行った。これらは、「東京タワー」や「この国・この場所」とは異なり、読者に違和感を生じさせる。学習者にとっては、現代の日本社会と作品世界の関係を考えるための契機となる言葉である。

ア　トウキョウタワー

「トウキョウタワー」は、この作品と日本を結び付ける唯一の単語である。この単語抜きでは、無国籍感が強まる。

トウキョウタワーは、遠景は「きれい」なのに、近景は「ぼろぼろ」だと二度繰り返されている。高度成長期のシンボルとも言える東京タワーの寂れ方は、千年という時間経過の象徴だと考えられる。このような状態であれば、テレビ塔としても、観光施設としても、既に機能停止になっているはずである。〈わたし〉にとっては、トウキョウタワーが存在する意味自体が分からなくなっていると思われる。

「トウキョウ」というカタカナ表記に対しては、この時代には、漢字が使用されていない、漢字の意味が分からない等の解釈が認められた。また、カタカナで古さを表そうとしたと考える者もいた。

それとともに、「「東京」だということが分からない。みんなが「トウキョウタワー」と呼ぶから自分もそう呼んでいる」等、地名自体への意識が薄れてしまったのではないかと理解している者も目立った。

現実世界とは異なる、別の世界を描くために、片仮名の「トウキョウ」としたという意見も多く出された。「今現在私達が住んでいる世界と「おめでとう」の世界は少し違う。今のような生活を私達がしていると、いつか本当にこのような世界になってしまうかもしれないという警告」だと受けとめる者もいた。

関連して、軍都廣島（広島）とヒロシマの関係のように、「原爆ドームが被爆を受けて呼称を変えたのと同じ、東京タワーが戦争で吹き飛んだものが何らかの目的で再建され、「トウキョウタワー」と表記されるようになった」と想像を膨らませた意見もあった。

トウキョウタワーは、〈わたし〉と「あなた」の再会の間ずっときれいな遠景として見えている。たまにしか会えない「あなた」も、同様に美化されているのではないかという穿った見方をする者もいた。

イ　この島

「この島」は、「あなたのおとうさん」の言葉（「この島には昔はもっともっとたくさんの誰かが住んでいた⑧／この島にはもっとたくさんの誰かがいたんだ⑯」）の中に登場する。

〈わたし〉も、自分が住んでいる場所が「島」であることは、「少し波が高い」等、当然のこととしている。歩いて一日というトウキョウタワーも、この島の中にあると思われる。

学習者は、「トウキョウタワー」と同様に、「この島」という一語から作品の背景を掘り下げていった。多くは環境の悪化と、社会システムの変化に、「島」という表現がなされた理由を求めていた。

前者については、温暖化・災害等が原因で、「陸地が水没し、その後に生存することができた少数の人たちの住む場所になった」「東京近郊だけが残り、その他の土地は全て消滅した」といった自然科学的で合理的な解釈を行っていた。

後者については、「国として機能できるほど人もいないし、政治や生産活動も行われていない。国はあまり馴染みのないものになってしまった」「土地は残っても日本という国家は分裂した」等、「国家」の概念・機能が変容したと考えていた。さらに、「教育なんてものもなければ教えられるような知識人もいない」ために、「自分の住む場所以外の広い世界を知らない」等、〈わたし〉が現実を把握できる範囲が限られている理由を、社会的な関係の欠如に求める者もいた。

四　「おめでとう」と「神様」の関係性に関する学習者の読み取り

「おめでとう」には、「神様」との直接的な関連を明示する記述は認められない。これは、「神様」と同じ話を変奏する「神様２０１１」や、「くまにさそわれて、ひさしぶりに散歩に出る」と書き出される「草上の昼食」とは異なる。

しかしながら、学習者は、「おめでとう」から、「神様」との繋がりを感じとる。論者は、今回の授業クラス以外でも、「おめでとう」を教材として活用したことがある。その際にも、「神様」を思い出すという感想を聞くことがしばしばあった。

高橋（二〇一八）は、「おめでとう」と「神様」「神様２０１１」の関係について、次のように述べている。

この作品は、『神様２０１１』以前に書かれた作品でありながら、『神様２０１１』を超えた世界を描いているという点において、『神様』『神様２０１１』からの系譜を受け継いでいるものと考えられ、『神様２０１１』の教材としての意味を深める上でも参考に値する作品と言える。179頁　（傍線・論者）

高橋は、「神様２０１１」の時間軸について「原発事故による急激な変化とその変化が不可逆的な切迫感を持って迫る時間が日常生活に直接的に嵌入してきている」174 と述べている。「おめでとう」は、その変化が限界を超えた後の世界を描いているということなのだろう。

一・三月の授業では、「系譜を受け継いでいる」という点について、本文に即して、もう少し具体的に検討するために、「おめでとう」の〈わたし〉と「あなた」は、「神様」の誰のイメージを受け継いでいるのかという学習課題を設定した。

論者は、〈わたし〉は「神様」の「わたし」を受け継ぐ者だと認識していた。その語り口は、「草上の昼食」の「わたし」を彷彿させる。一方、離れて暮らす「あなた」や「あなたのおとうさん」は、「くま」を受け継ぐ者だと考えていた。昔の記憶と繋がる「あなたのおとうさん」は、「くまの神様」と重ねられる可能性も想定していた。

（一）最初の検討　［一月］

一月の授業での学習者の読み取りは、論者にとっては予想外の結果となった。七十％以上の学習者が、〈わたし〉は「くま」を、「あなた」は「わたし」を、それぞれ受け継ぐ存在だと考えていた（両者とも「子孫」を含む）。多くの学習者が、「おめでとう」は、「草上の昼食」で故郷に戻った「くま」の後日譚としてイメージしているわけである。

それゆえ、第三節で検討した両語に対しても、「トウキョウタワーは、映画「猿の惑星」の自由の女神のような存在。ただ、昔からそこにあるもの」「「くま」には国家というようなイメージは無い」等、「くま」の立場から理由付けを行うものが含まれていた。

（二）再吟味　［三月 第一時］

表２中のア～コは、学習者が、一月の授業の際に、理由付けの根拠として挙げた題材である。

三月第一時は、もう一度本文を読み返した後で、現時点では、どのようにして十個の題材を根拠として選び、「あなた」と〈わたし〉を、どう理解したのかを再吟味した。

表２は、その結果を整理したものである。

表２からは、学習者が、本文中の様々な事柄に着目していることが分かる。

むろん、各題材への注目度には濃淡がある。表２では、十％以上の部分は強調して表示した。（表２中の％は、縦列の総計中に占める割合を示す。）

「あなた」については、(e)草の匂いと、(c)・(f)・(g)過去の記憶との繋がりを感じさせる題材が多く選ばれている。

〈わたし〉は、(a)・(h)の食に関する事柄と、(b)トウキョウタワーが多い。

(d)抱擁は、「あなた」・〈わたし〉とも多く取り上げられている。

これら反応数が多い題材は、いずれも「神様」や「草上の昼食」の本文中に登場する。これらに対する言及が多いのは自然なことだろう。

表３は、三月第一時の再吟味によって、一月時点の考えから変化し

表 2

根拠として挙げられている事柄		あなた わたし		あなた くま		〈わたし〉 わたし		〈わたし〉 くま		総計	
(a)	魚（釣り・干し魚・料理）	1	1%	3	9%	8	24%	49	24%	61	17%
(b)	トウキョウタワー	1	1%	2	6%	8	24%	32	16%	43	12%
(c)	歌	10	11%	4	12%	2	6%	13	6%	29	8%
(d)	抱擁（ぎゅっ）	11	12%	1	3%	3	9%	31	15%	46	13%
(e)	草の匂い	33	36%	15	45%	2	6%	7	3%	57	16%
(f)	お父さん	22	24%	4	12%	2	6%	5	2%	33	9%
(g)	記憶・他の人々の存在	7	8%	1	3%	1	3%	13	6%	22	6%
(h)	食生活・畑作	2	2%	1	3%	5	15%	23	11%	31	9%
(i)	言葉遣い	5	5%	2	6%	3	9%	31	15%	41	11%
(j)	副題	3	3%	3	9%	6	18%	8	4%	20	6%
	計	92		33		34		204		363	

たかどうか、その実態を整理したものである。「その他」は、明確な分類が難しいもの、無記入等である。

表3からは、解釈が逆転した者も存するものの、それほど大規模な変化が起こっているわけではないことが分かる。二回の検討を経ても、六割強の学習者は、「あなた」が「わたし」で、〈わたし〉が「くま」だという、たすき掛けの理解を続けている。

そこで、個々の学習者は、それぞれの根拠に基づいて、どのように解釈を行っているのかという点について、研究資料をあらためて精査した。

その結果、学習者の再吟味は、必ずしも十分な掘り下げができているわけではないことがうかがえた。自らの解釈に安住するような傾向が認められた。

たとえば、(b)トウキョウタワーは、〈わたし〉が、「くま」である根拠として多く取り上げられていた。ただ、その理由付けの中には、〈わたし〉が人間であったら、一日かけて歩くようなことはしないだろうという、いくぶん安直な判断がしばしば認められた。この作品世界の中で、はたして自家用車等の乗り物が存在するだろうか。また、「草上の昼食」では、「くま」が苦労して自動車の免許を取得していた。そのことも、多くの学習者からは忘れられていた。

その他の項目についても同じ様に、一面的とも言うべき見方によって行われた理由付けが少なくなかった。

それに加えて、個別的な分析に止まり、行動・心情全体から、一人の人間としての〈わたし〉の人物像を考えることができていなかった。ただ、この点については、論者が、学習課題の設定（複数の項目を組み合わせて考えてみよう等）を工夫する必要があった。

表 3

	一月		三月		計
	あなた	〈わたし〉	あなた	〈わたし〉	
変化無し	わたし	くま	わたし	くま	41
	くま	わたし	くま	わたし	8
逆　転	わたし	くま	くま	わたし	10
	くま	わたし	わたし	くま	7
その他	その他（全て「くま」，「人間」他）				15
					81

（三）参考資料を用いた三回目の検討　［三月 第二時］

学習者の読みは、まだかなり深まる余地がある。そのように考えて、三月の第二時には、後掲の参考文「ある作品論」を提示した。

この参考文は、論者が、木俣壬正というペンネームを用いて作成したものである。〈わたし〉は「わたし」、「あなた」は「くま」という立場から、学習者の最大公約数的な意見に対して異議申し立てを行った。学習者が反論をまとめやすいように、論理の隙間の多い文学評論的な文体を選んだ。注や中略も全て原文のママである。

今回、ペンネームによる参考文を提示したのは、学習者が自由に自分の考えをまとめて欲しいと考えたからである。授業の中で、論者が、発問や解説として反論を提示すると、それを「正解」として簡単に受け入れてしまう者がどうしても出てしまう。

授業では、参考文に対する自分の意見を文章化した。全員が書き終わった後で、筆者名が論者の名前のアナグラム（きまたみまさ←たまきさまみ）であることを明らかにした。

『おめでとう』は、『神様』や『神様２０１１』は、文学作品としての空間を共有している。

そのことは、読み手には実感的に理解できるはずだ。『神様２０１１』の「あのこと」からさらに千年が経過した未来。川上は、そのタイトルとは裏腹なディストピア（注・ユートピア・理想郷とは正反対の世界）な世界を提示する。（中略）

『おめでとう』の登場人物は、むろん千年の時空を隔てており、『神

様』の登場人物と同じではない。しかし、イメージが共通することは言うまでもない。

『おめでとう』の「あなた」は、『神様』の「呼びかけの言葉としては、貴方、が好きですが、ええ、漢字の貴方です、口に出すときに、ひらがなではなく漢字を思い浮かべてくだされば、いいんですが、まあ、どうぞご自由になんとでもお呼びください。」という台詞を思い浮かべるまでもなく、「くま」が想定される。

どこか離れた場所から、〈わたし〉を訪ねてくる。歌を教えてくれる父を持つ（この父の姿は、子守歌を歌おうとする『神様』の「くま」を微笑ましく思い出させる）。自然の中で暮らすだけに「草の匂いがする」。その他、状況証拠は幾つも挙げられよう。（中略）

「あなた」に比べれば、〈わたし〉は、『神様』の登場人物とは直線的に結びついてはいない。剥き出しの自然に直面し、畑作や釣り等、自給自足の暮らしをしている（むしろ「強いられている」と言うべきか）。千年後であるはずなのに非デジタルで、乗り物すら無い非文明の日常を生きている。

『神様』や『草上の昼食』のおしゃれなランチとは異なり、食糧事情もずいぶんと乏しい。「干し魚」は「くま」の姿を連想させはするものの、「動物や鳥がとってしまわないよう、注意して干します」とあり、それを作るのは人間としての行動だと考えるべきだろう。簡単な料理くらい出来なければ、一人では生きていけない。

とはいえ、この「わたし」は、『神様』よりも『草上の昼食』の「わたし」により近いかもしれない。〈わたし〉は、これまでの作品と同様に他の人間からは離れて生活している。『草上の昼食』の「わたしも馴染まないところがある。」というつぶやきは、ここで小さく響き合っている。

『おめでとう』では、〈わたし〉は近くに人が住んでいることは好ましいとは思っているものの、積極的に近所に住む人たちと付き合おうとはしていない。

ただ、あなたのお父さんの言葉に触発されてか、周りの人間に対して、意識を向けようかという思いを持ち始めている。「くま／あなた」以外の他者の存在への関心。それが芽生えたことが、「わたし」〈わたし〉の最も大きな変化だろうか。直接言葉を交わすためには時間がかかるかもしれないが（中略）

それにしても、人類の絶滅を予想させる世界の中でも、〈わたし〉と「あなた」は、『神様』のように同じ場所で暮らすことをしていない。それほど「クマ／ヒト」の世界の隔たりは大きいということなのか。けれども、『おめでとう』では、〈わたし〉は、「あなたがすきです」と自らの思いを素直に表出することができた。出せないまま机の中に忘れられた『草上の昼食』の手紙に託された思いは、やっと伝えられるのかもしれない」（後略）

表4は、この文章に対する学習者の受け止め方を整理したものである。表中の「賛否」は、賛否の両方に言及したものである。賛成・反対にかかわる「その他」は、参考文に基づいて作品に対する自説だけを述べたもの、立場が曖昧なもの等である。

表4からは、参考文に対する賛成・反対の比率は同程度であること、また、三月第1時にどのような解釈を行っていたのかは、参考文の賛否には、ほぼ無関係だということが理解できる。

ここでは、先ず、「反対」「賛否」という

表 4

「おめでとう」	三月時点の解釈 あなた	〈わたし〉	賛成	反対	賛否	その他	計
「神　様」	わたし	くま	20	16	11	4	51
	くま	わたし	3	4	4	4	15
	その他		6	6	2	1	15
	総　計		29	26	17	9	81

立場の意見を見てみたい。これらは、反論である参考文に対するの再反論という性格を持つ。再反論として多いものを二つ挙げておく。

一つは、「あなた」や「あなたのおとうさん」が「くま」だとしたら、〈わたし〉に対して、なぜ日付・時間の経過や言葉を記憶することを求めるのかという違和感の表明である。

「くま」は、かつて人間の世界で生活していた。そんな「くま」が、人間らしい営みを忘れてはいけないと諭すというのは、それほど不自然とは言えないのではないか。逆に、人間である「あなた」が、「くま」に、それらの記憶を求める方が不自然ではないだろうか。

もう一つは、「草の匂い」に注目するものである。「「草の匂い」がするを、「あなた」がくまである状況証拠として挙げるなら、「神様」で語り手がくまに対して言った「くまの匂いがする」はどこに行ったのか。人間ならともかく獣なら草の匂いがするにしても獣臭さが前に出るのではないか」等の反論が多く出されている。また、〈わたし〉は、「あなた」と「ぎゅっとすると、あたたかい」といっている。しかし、「神様」の「くま」の身体は冷たかったと書かれていた。

この点も、夏と冬という気候の違いや、ずっと寒がっている〈わたし〉の生活状況等を考慮することはできないだろうか。

ワークシートの記述からは、学習者が、参考文を手がかりにして、あらためて本文を読み返したことがよく伝わってきた。〈わたし〉と「あなた」の人物像、二人の関係、個々の作品について、参考文を手がかりにして、自分なりの立場で、一月段階よりもよく練られた文章をまとめることができていた。先に再反論として示した例のように、再考の余地が残されていたとしても、次の読みを生む起点を確実に生み出すことができたと評価できよう。

その過程で、次のように、これまで学習した作品を新たな角度から見直そうとする文章も認められた。

「「神様」や「草上の昼食」では隣の部屋に引っ越してきたとか車でとか人間の生活をしているくまが描かれていたのに、「おめでとう」では現実と同じく人間と別々に暮らしているという距離感のちがいにどんな意味があるのか気になった。」

「「草上の昼食」で「くま」はもう人間社会と関わらないと決めたが、「わたし」が会いたいと何度も「くま」に言ったのか、「おめでとう」では遠い場所から、くまである「あなた」が「わたし」を訪ねてくると思うと感動する。」

本節の最後に、「おめでとう」の意味を再考したものを紹介する。

「千年後ではあるが、（この〈わたし〉が「神様」の「わたし」と同一人物なのか、子孫なのか分からないけど）原形、または基本的なスタイルは「神様」と一緒であり、そのなかでも人間的に少し成長した〈わたし〉を描くことで、新しい生命が誕生するのと同じくらいの奇跡が起こったのを連想した。そういう意味でタイトルが「おめでとう」なのかなと思った。」

「おめでとうの「あなた」をくま、〈わたし〉を人間のほうだと考えるならば、この作品論には共感できる所がある。「神様」の登場人物とは違えど、「世代を越えた再会」というような物語を想像できる。過去に互いが愛しあった二者が、ディストピアとなったこの世界で、この二人だけが共に過ごし、「クマ／ヒト」の隔たりを感じさせていない「あなたが好きです」。「わたし」が「くま」に向けた気持ちを、今ようやく伝えることができた。このことに向けての「おめでとう」なのかもしれない。」

両者とも、「神様」等との関係をとらえ直した上で、「おめでとう」に託されたメッセージを、自分なりに深めていこうとしている。これ

らをスタート地点として、新たな読みを更新することが期待できよう。

五　おわりに

本稿では、「おめでとう」の教材研究と授業の実践報告を行った。本稿の検討によって、「おめでとう」は、学習者が想像力を積極的に発揮しながら読み進めることを要求する教材であることを、明らかにできたのではないかと思われる。また、「おめでとう」は、「神様」「神様２０１１」「草上の昼食」に接続する世界を構築していることも確認できたと思われる。学習者は、「おめでとう」を読みながら、濃厚な「くま」のイメージを感じていた。

読み深めとは、学習者が自らの読みの到達点を更新し続けることである。今回は、「トウキョウタワー」や「この島」という二つの言葉に着目した分析、登場人物を「神様」の登場人物を結び付けるという仮説的な課題、反論的な参考文への意見文作成等を、学習課題として設定した。これらへの取り組みを通して、学習者は作品を繰り返し読み、新しい認識内容を獲得することができた。

とはいえ、本稿は、学習者の読みの変容のごく一部を表層的にとらえたに過ぎない。教材を深く読み解くためには、学習課題の設定の仕方だけでなく、学習者の発言や断片的なつぶやき、あるいは文章表現やメモを共有して、互恵的に深めていく方策について研究することも重要である。特に後者の有効性と具体的な方策については、さらに授業実践を通して研究を深めたい。

参考（引用）論文

本間祐（二〇〇三）「長篇味の短篇集　『おめでとう』」　「総特集川上弘美読本」　「ユリイカ」　中央公論新社　二〇〇三年九月臨時増刊号」158～163頁

池田澄子（二〇〇三）川上弘美『おめでとう』新潮文庫・解説　二〇〇三年　新潮社　204～213頁

鈴木和子（二〇〇五）「『おめでとう』、野口哲也（二〇〇五）「『おめでとう』―ミレニアムの〈わたしたち〉―」　『現代女性作家読本①　川上弘美』原善編　鼎書房　72～75頁、76～79頁

高橋正人（二〇一八）「『文学国語』における深い学びを実現するための読みの可能性に関する研究～川上弘美「神様２０１１」における「あのこと」の持つ意味をめぐって～」（「福島大学人間発達文化学類論集」第28号　45～60頁）。引用は『文学はいかに思考力と表現力を深化させるか』（コールサック社　二〇二〇年　151～184頁）による。

田口かおり（二〇二〇）「『おめでとう』西暦二千二十年のわたしたちへ」（東海大学新聞 WEB 版 column 今週の本棚二〇二〇年九月一日 tokainewspress.com/view.php?d=2000）

玉木雅己（二〇二一）「「自己と他者の読みを重ね合う小説教材単元の実践的研究―「神様」「神様２０１１」を読み返す授業―」「国語教育研究」第62号　広島大学国語教育会　38～50頁

玉木雅己（二〇二二）「小説の単元編成に関する実践的研究―川上弘美『草上の昼食』の教材化のために」　「国語教育研究」第63号広島大学国語教育会　56～67頁

＊本稿は、前任校（広島県立賀茂高等学校全日制、二〇二二年三月まで勤務）での授業実践に基づいてまとめたものである。

（広島県立広高等学校）